

# 自動書記による長編恋愛詩『別情歌』

—江戸の詩か昭和の創作か—

三浦清宏

芥川賞作家の文学者三浦清宏さんは、スピリチュアリズムには大変造詣が深く、その関係から生前の山波言太郎（桑原啓善）とは交流がありました。その旧知の三浦清宏さんから今回思いがけなく大変めずらしい貴重なご寄稿をいただきました。山波言太郎が最後に発表した詩集『別情歌』についての心霊研究とスピリチュアリズムの視点から論じられた評論です。

一

最近、旧知の方からちよつと変わった興味深い詩集を送っていただいたので、報告したい。（筆者註・これを書いたのは二〇二二年の秋で、この詩集の著者、山波言太郎氏が亡くなる一年前）

題名を『別情歌』と言う。一三〇ページほどの雑誌サイズのペーパーバックで、何の変哲もない普通の本だが、最初見た時に、ふと表紙に興味をそそられた。どこかの寺の縁側から欄干越しに丁髷や島田髷の

# 自動書記による長編恋愛詩『別情歌』

— 江戸の詩か昭和の創作か —



## 『別情歌』

山波言太郎 著

2012年6月29日 初版 発行

定価 1,200円 (+税)

でくのぼろ出版 (山波財団)

江戸風の男女数名が、目の前に広がる川か湖の向こうの緑地の上に、半分姿を現した小さな富士山を眺めている図で、初め、広重の「東海道五十三次」の一場面に似ていると思ったが、後で、北斎の『富嶽三十六景』中の「五百らかん寺ささるどう」であることがわかった。原画よりも色彩、輪郭がはつきり印刷されている上、原画の左上にあるタイトルと作者名が消されているために、この頃流行りの、古典作品を現代風にアレンジしたイラストのようにも見える。著者が九十歳を過ぎた人なので、古いものを使って、反って新味を出しているところがおもしろいと思つて、眺めたわけである。

ところが、何気なく本を開き、「序文」を読み出して、驚いた。この絵は内容にふさわしい絵だったのである。江戸時代の旅を表すものだった。著者の言うところによれば、今から六十六年前の終戦の翌年、三月下旬から四月上旬にかけての数日間に書いたもので、たしかに自分がペンを持って書いたには違いない

が、内容はすべて、誰か分からぬ他の人間が喋ったのをそのまま写したのだと言う。「二字一句の修正無しで、誰かの口移しで書かされたものです」

とある。どこからか声が聞こえ、自分の意志とは関係無く、筆が独りでに動いて書いて行く。心靈研究などで言う「自動書記」である。歴史上多くの実例があり、それについては後で一言する。

これを書いた時、著者は二十五歳。慶応大学経済学部在学中に学徒出陣で海軍に入り、特攻基地で気象士官をしていたが、敗戦となり、家に戻ったばかりの頃である。その時の有為転変の切迫した心境と、この詩の悲恋の心情とが重なったかどうかはわからない。著者はその十日後に今の奥さんと結婚している。当然新妻を迎える喜びの気持が詩にも反映するはずだが、どういうわけか詩は愛の破局の悲しみに徹している。著者はそれを、今結婚しようとする相手と自分との前世の姿と見て、これからの結婚がそれを償うものであると感じたと言う。

「これまでその記憶らしいものは断片すらなかったのだが。実感としては否定できなかった」と言う。

なぜ「実感として否定できない」のか、ということは書いてないが、相手の女性に対する思いの中に含まれていた或る感情が、この詩によつてはじめて納得できたともいうことだろうか。

著者はしかし、この詩を、妻となった女性にも、誰にも見せなかった。むしろ隠した。

「ひそかに手造りで清書してささやかな一巻の詩集とし、以後封印した」

自分さえわかっただけでいいことである。人に見せて、誤解を生むようなことがあってはならない。とくにこれから結婚しようとする若い女性をおびえさせたり、傷つけたりするようなことは避けるべきであ

ろ。著者は、

「心の秘密というより、人生の不思議、いや詩の不思議ともいえる。だから、私はこの本を秘匿した」と言っている。

そうして、この詩集は完全に忘れられた。半世紀以上の星霜が経って、ある日台風が彼の家を直撃し、屋根をむしり取るまでは。転居騒ぎの最中に、古い行李の中からこの手作りの詩集が再び顔を出したのである。

一一

それでは詩について述べよう。

「プロローグ」（筆者註・著者の命名と思われる）二詩と、本詩である長詩が四、それに付け加えた最も長い詩が一、そのほか「折ふしの歌」なる短詩七の全十四篇、二四九聯、一〇七〇行で成っている。昭和二十一年三月二十六日から同年四月六日までに書かれたという記録があり、十二日間で書かれたものとしては極めて長い詩と言うべきだろう。一つのテーマについてこれだけ長い詩を、私は日本の詩の中で見たことがない。

まず「プロローグ」の詩だが、「光ある珠」と「天のかけ橋」の二つがある。両者とも、あの世からこの世を見て、詩の誕生を歌ったものだ。最初の「光ある珠」では、珠のように光る水面の中から桜の花びら一つ浮かんで流れるように、昔の思い出が浮かんで来て、静かな歌声が聞こえる。その流れの岸をさま